日本語教育における「中級文型」[1]

津坂　朋宏

1．はじめに

本研究は日本語を第一言語としない者に対する日本語教育の分野におけるものである。今回行った研究は対象を中国での日本語教育に限定しているため、対象が現在の中国人の日本語教育という前提がある。「中級文型」とは、日本語の学習のある程度進んだ学習者が、自由にかつ不自然でない複文構造の習得を目的とした新しい教科書文法である。

2．研究目的

本研究は日本語教育で現在使われている教科書文法の更なる改善を目指している。そして研究から生まれた「中級文型」の必要性を説くことで、今後「中級文型」の研究が進んでいくこと、そして今後教科書文法が研究されていく中で「中級文型」の設置が検討されることを目的としている。

3．研究方法

資料を調べて問題点を見つけ、有効な解決方法を考える。資料は日本語教育における教科書の文法と、中級程度の実力を持った日本語学習者の作文である。

4．「中級文型」の考察

教科書文法の傾向と中級の学生の書いた作文の傾向について報告する。そして「中級文型」とはどういった文型であるべきかを考える。

4．1　教科書にある複文とその説明方法

今回、テーマにするのは複文[2]に関するものである。複文とは、文の中心となる主節に従属節を加えた二つ以上の節で構成されている文のことである。まず学習者が使用している教科書の中で説明されている主な複文を調べる。教科書は『新版中日交流標準日本語』（人民教育出版、光村図書出版株式会社合作編写 2008。以下『新版標準日本語』）の『新版標準日本語　初級上・下』を参考にした。この教科書は現在特に中国国内の中国人学習者が使っているオーソドックスな教科書の一つと言える。

まず一課毎にある「语法解释」に載っている文法から、次のかたちで説明されている文法を採り上げる。節の接続は次のようなかたちで文法が説明されている。

小句（接続語）小句

「小句」とは文を表すが、この場合は複文なので節を表している。小句が接続語によって複数あり、全体が複文であることを表している。接続語とは接続助詞や形式名詞など、節と節を結びつけることのできるもののことである。このかたちで表わされている複文は、逆接「が」、起因[3]「が」、原因・理由「ので」、条件「と」、目的「ために」などの連用節であった。

次にこのかたちで説明されているものを挙げる。

動（接続語）～

「動」は動詞を表している。「～」は教科書の説明には「表示根据上文省略的内容[4]」とあり、文もしくは複文の節に相当するものである。第20課に時間「前に」、第21課にタ形に続く時間「後で」がある。これらも連用節に属するものである。またその他に、時間を表す連用節に属するものが以下のようにある。

「～から」
小句（簡体形）＋時
名＋の／動（簡体形）＋間／間に

「名」は名詞を表している。以上が教科書に載っていた連用節についてである。

次に並列節について述べる。まず上で紹介したこの「小句（接続語）小句」で表わされているものには、付帯状況の「て，ないで」と「まま」の並列節があった。同じ接続語を複数回用いる複文は次のように文法説明されている。

小句（接続語 a）小句（接続語 a）

このかたちで表わされているものは並列節の列挙「とか」と「し」である。これ以外にも並列節を表したものは複数ある。まず次のかたちで表わされているものである。

動，一类形，二类形，名（接続語）動，一类形，二类形，名

「一类形」は形容詞、「二类形」は形容動詞を表している。このかたちには二つの動詞を接続する継起「て」「てから」と、二つの形容詞、形容動詞、あるいは名詞を接続する単純並列「て，で」があった。その他にもかたちの異なるものの中で並列節を表すものを挙げてみる。

動たり　動たり　します
一類形かったり　一類形かったりです
二類形だったり　二類形だったりです
名だったり　名だったりです
動ながら

以上が『新版標準日本語　初級上・下』に載っている連用節、並列節である。文法説明が文全体を捉えていないものもあり、採り上げた文法の前後にどういった文ないし語が入るのか曖昧なものが目立つ。そしてこれらに加えて教科書には名詞節、連体節が載っている。以上のものをすべてまとめると、『新版標準日本語　初級上・下』に載っている複文の従属節は以下のようになる。

文法説明が統一されているもの
小句（接続語）小句
動（接続語）～
小句（接続語 a）小句（接続語 a）
動，一類形，二類形，名（接続語）動，一類形，二類形，名

文法説明が個別のもの
「～から」
小句（簡体形）＋時
名＋の／動（簡体形）＋間／間に
動たり　動たり　します
一類形かったり　一類形かったりです
二類形だったり　二類形だったりです
名だったり　名だったりです
動ながら

従属節
名詞節……「こと」、「ほう」、「の」、「よう」、引用節「と思う」系、引用節「と言う」系
連体節……動詞修飾、動詞文修飾、形容詞文修飾、形容動詞文修飾、名詞文修飾、解釈「という」
連用節……逆接「が」、起因「が」、原因・理由「ので」、条件「と」、目的「ために」、仮定「たら」、逆接仮定「ても」、原因・理由「て，で」、仮定「ば」、仮定

「なら」、目的「ように」、原因・理由「ために，のために」、逆接「のに」、時間「前に」、時間「後で」、時間「から」、時間「時」、「間，間に」

並列節……付帯状況「て，ないで」、付帯状況「まま」、列挙「とか」、列挙「し」、継起「て」、継起「てから」、単純並列「て，で」、列挙「たり」、付帯状況「ながら」

『新版標準日本語　中級上・下』になると学習する複文の分類も複雑になるためここでは省いた。内容は主に初級で学ぶ従属節の応用となっている。学習者は主要な複文の学習を初級で終える。

4．2　中級の学習者が書く作文の傾向

中国江蘇省にある中高一貫の外国語学校[5]の生徒が書いた2008年度の作文を資料とする。これを参考に学習者の複文構造の傾向を調べる。作文を集めた生徒は高校1年生から高校3年生までの生徒である。高校1年生の生徒数は12名で、集めた作文の数は63編である。高校2年生の生徒数は12名で、集めた作文の数は97編である。高校3年生の生徒数は17名で、集めた作文の数は46編である。合計41名の生徒の、206編の作文を参考にした。

生徒の多くは、中学1年から日本語の学習を始めており、高校生になるまでに三年間以上の日本語の学習を終えている。筆者が担当した授業で使用した教科書は『中日交流標準日本語』(人民教育出版、光村図書出版株式会社合作編写 1998。以下『標準日本語』) と『新版標準日本語』である。高校1年生は後期から『新版標準日本語　中級上』に入った。高校2年生の最初の授業は『標準日本語　中級上』の第1課からで高校3年生は第11課からだった。筆者の授業よりも中国人教師の授業の方が教科書内容は進んでいたため、実際には筆者の授業で教える以上の内容を生徒たちはその時点で学習し終えていた。

また中級の定義について『新版日本語教育辞典』(日本語教育学会編 2005) には以下のように書かれている[6]。

やや高度の文型・文法，漢字（1000字程度），語彙（6000語程度）を習得する段階。まとまりのある談話の内容を理解したり、一般的なことがらについて会話や読み書きができる能力を身につける。学習時間は600時間程度。

初級の学習時間は300時間程度、上級は900時間程度と書かれている[7]。ちなみにこの学校の日本語科の生徒はおおまかに計算すると一年で200時間程度の授業を受ける。よって高校1年生を含めて、生徒達の日本語能力は中級以上と考えて差し支えないとする。

問題とする複文について説明する。今回、複文構造を分かりやすくするために、次のように括弧付けをする。複文の大きな要素である主節とは、そこで文が成立する節のことで

ある。従属節のない主節だけのものは単文である。

［主節］

複文のもう一つの大きな要素である従属節には名詞節、連体節、連用節、並列節がある。ここでは名詞や形式名詞を修飾する修飾範囲の狭い連体節、名詞節を「小囲従属節」、主節の述部や主節全体に関係する連用節と並列節を「大囲従属節」としてまず二つのグループに分けた。今回特に重要なのは大囲従属節である。大囲従属節の連用節を細かく見ると時間節、条件節、理由節、仮定節などがある。並列節にはテ節や中止節などがある。

［大囲従属節／主節］

そして大囲従属節ともう一つ、補足節に焦点を当てる。補足節とは従属節の中で名詞節に属するもので、述語を補う働きをする名詞節のことである[8]。

［主節｛補足節｝］

4．2．1　補足節

以下の例文は補足節とすべき箇所（下線部）を、一つの文として完結させている文である。非文には星印「*」を付け、判断の難しいものにははてなマーク「?」を付けた。アポストロフィー「’」の付いたものは筆者が例文を直したものである。今回採り上げている問題点と関係していない節の説明は省略した。

(1-1)*［こんな結末を書いた理由は、<u>人々は何かをするためには、色々なものが必要です</u>。］（高校１年生）

(1-1’）［こんな結末を書いた理由は、｛人々は何かをするためには、色々なものが必要だから｝です。］

述部にある理由を表す接続語「から」を持つ節（分裂文、分裂構造）は補足節としていない例がある[9]。しかし、ここでは述語を補っているという判断で補足節に分類した。例文の下線部を見ると、そこだけで文が完結しているのが分かる。下線部のない文の頭の部分が、どこにも結びつくことなく浮いている印象を覚える。以下の二つの例文にも同様のことが見られる。

(1-2)＊［一番印象の深いのは日本人のサービス態度はとても良いです。］（高校２年生）
(1-2’）［一番印象の深いのは｛日本人のサービス態度はとても良いということ｝です。］

(1-3)＊［おもしろいのは、サッカーとか野球などのスポーツはチームワークそのもののスポーツです。］（高校３年生）
(1-3’）［おもしろいのは、｛サッカーとか野球などのスポーツはチームワークそのもののスポーツということ｝です。］

以上が補足節に関する問題である。

４．２．２　複文構造

次の例文は、筆者が生徒の作文を見た際に、複文構造を直したものである。

(2-1)＊［この時、涼しい水の中に飛び込んで／なんて快適でしょう。］（高校１年生）
(2-1’）［この時、冷たい水の中に飛び込むのは｛なんて快適なこと｝でしょう。］

(2-1’）における「この時、冷たい水の中に飛び込むのは」という名詞節に対して、(2-1)の「この時、涼しい水の中に飛び込んで」は並列節、もしくは連用節である。これらの従属節は主節全体に関係する大囲従属節であるのに対して名詞節は形式名詞を修飾する小囲従属節である。修飾する範囲が違うので複文構造の捉え方も違っていると考える。「なんて快適でしょう」は「なんて快適なことでしょう」とした。

(2-2)＊［この病気になった人と握手とか、同じタオルを使（う）とか、感染することができます。］（高校２年生、括弧内は筆者）
(2-2’）［この病気になった人と握手をしたり、同じタオルを使ったりすると、／感染することがあります。］

(2-3)＊［ですから、私は今までこの時代に生きていて／とても嬉しいです。］
（高校３年生）

(2-3)は主題の助詞「は」の付いた「私は」を「今までこの時代に生きていて」と「とても嬉しい」との両方に結びつくと考えて次のように解釈するのが正しいかもしれない。

(2-3)＊［ですから、私は（今までこの時代に生きていて／とても嬉しい）です。］

ただ(2-3)が非文なのは、複文構造の問題というよりも「今まで～生きている」という表現が、書き手の表したいことと結び付いているのか判断が難しいためかもしれない。複文構造を変えずに（2-3’2)にすることもできるが、ここでは(2-3’)が一番良いと考える。

(2-3’)［ですから、私は｛今この時代に生きていること｝がとても嬉しいです。］
(2-3’2)？［ですから、私は（今この時代に生きていて／とても嬉しい）です。］

以上が複文構造に関する問題である。

4．2．3　接続語

次の例文は、従属節の接続語（下線部）を直した文である。生徒の作文を見ると接続語「て」を使った節「テ節」が頻繁に出てきた。それを適当な接続語に置き換えた例である。接続語「て」以外の接続語を使って連用節にしたものが主である。

(3-1)＊［話したり写真を撮ったりして、／頂上にむかって登りました。］（高校１年生）
(3-1’)［話したり写真を撮ったりしながら、／頂上にむかって登りました。］

(3-2)＊［テレビ番組を見るといって、／人によって／見る番組が違います。］
（高校２年生）
(3-2’)［テレビ番組を見るといっても、／人によって／見る番組が違います。］

(3-3)＊［放課後、友達と少し遊んで、／知らないうちに夕方になってしまうのです。］
（高校３年生）
(3-3’)［放課後、友達と少し遊んでいると、／知らないうちに夕方になってしまうのです。］

以上が接続語に関するものである。

4．3　新しい文型の必要性

生徒の作文の調査から「補足節の習得」「適切な複文構造の習得」「適切な接続語の選択」の三つの目的を達成する「中級文型」が必要と考える。学習レベルが中級の教科書に入ったということは、学習者にはある程度日本語の文章を書く力を求められるレベルになることを表す。教科書に載っている初級段階の文型にそのままおさめるのではなく、それ以上の文を書くことが要求される。しかし、学習者は接続語の意味を覚えるだけで、その接続語がどういった複文構造を採るのか把握できていない。そして中級の教科書文法は、文型

という文全体を捉えた文法ではなく、語法という文を構成する一部分をピックアップして説明する文法の割合が圧倒的に大きくなる。結果、複文構造を把握し切らないまま、学習段階を中級、そして上級と進めてしまうことになる。また、学習期間が増えるにつれて、学生の書く文が長くなる傾向もある。節の中を見るだけなら間違いはないが、節の繋がりである複文構造を見ると正しくない文が見られる。初級の学習では接続語の意味を覚えるだけで、その接続語の採る複文構造の習得まで学習することができていないと考えている。複文を完璧に習得するためには、更に複文構造を把握するための「中級文型」が必要である。

4．4　「中級文型」

「補足節の習得」「適切な複文構造の習得」「適切な接続語の選択」の三つの目的を達成する「中級文型」を考える。学習者が従属節を正しく使えないことについて考えられる原因は、大きく二つの理由が考えられる。一つは接続語の示す意味を正しく覚えていないこと、もう一つはその接続語が採ることのできる複文構造を正しく理解していないことである。「補足節の習得」は後者が原因である。「適切な複文構造の習得」は前者と後者のどちらにも原因のある可能性がある。「適切な接続語の選択」も単純に正しく接続語の示す意味を覚えていないと考えるのでなく、接続語の採る複文構造を覚えることで問題が解消できるのではないかと考える。今回考えるのは後者の複文構造を習得することによる解決である。

複文構造を文型としてまとめるために、従属節を二種類に分けた小囲従属節と大囲従属節を、「中級文型」では四つの従属節類に分けて考える。小囲従属節は第一従属節類とする。大囲従属節は第二従属節類、第三従属節類、第四従属節類の三つの文型にする[10]。

小囲従属節（名詞節、連体節）……第一従属節類
大囲従属節（連用節、並列節）……第二従属節類、第三従属節類、第四従属節類

4．4．1　補足節の習得

補足節は名詞節の一部であり、第一従属節類に属する。今回、生徒の書いた文で問題だったのは、「補足節がそれだけで文として成り立ってしまっている」ということだった[11]。これを「中級文型」としてどう学習すれば、生徒は補足節を使えるようになるか考える。

ここではまず、文の主部を表している助詞を、主題レベルと主語レベルに分けることが重要である。主題レベルの助詞とは、節を越えても力の及びやすいもので、主語レベルの助詞とは、節を越えると力が及びにくいものである。

主題レベルの助詞……「は（主題）」など
主語レベルの助詞……「が（主語、強調）」「は（主語、対比）」など

主題レベルの助詞と主語レベルの助詞という考えを持って、次の例文を再び見てみる。

(1-1)＊［こんな結末を書いた理由は、{人々は何かをするためには、色々なものが必要です。}］
(1-2)＊［一番印象の深いのは｛日本人のサービス態度はとても良いです。}］
(1-3)＊［おもしろいのは、{サッカーとか野球などのスポーツはチームワークそのもののスポーツです。}］

これらの例文それぞれの主部と述部の結び付きを見てみる。矢印は主題から対応する述部への結び付きを示している。

(1-1)＊［{こんな結末を書いた理由} は、
↳?
{人々は何かをするためには、{色々なものが必要} です。}］

(1-2)＊［{一番印象の深いの} は｛日本人のサービス態度はとても良いです。}］
↳?

(1-3)＊［おもしろいのは、
↳?
{サッカーとか野球などのスポーツはチームワークそのもののスポーツです。}］

矢印の出ている「は」主題レベルの助詞である。「人々は」の「は」は主語レベルのものである。(1-1)(1-2)(1-3)はすべて、主節の主題「は」が結びつく述部がないため非文である。

次に、主節主題の結びつく述部が表示されていなくても、成立している文を例に挙げてみる。この例には「象は鼻が長い」などが考えられる。下の四つはその主題「は」の結びつく述部が表示されていない文の例である[12]。

(1-4)［象は｛鼻が長い}。］
(1-5)［彼は｛足は速い}。］
(1-6)［戦国時代は｛複数の武将が勢力をふるって対立した時代}。］

(1-7) [おススメは、{僕はスタバのホットココア}。]

この主節の主題「は」の結びつく述部の見えない複文構造は次のように考える。

(1-4) [象は {鼻が長い}　。]

(1-5) [彼は {足は速い}　。]

(1-6) [戦国時代は {数多の武将が勢力をふるって対立した時代}　。]

(1-7) [おススメは、{僕はスタバのホットココア}　。]

これらの文は、矢印の先に終助詞「です」を加えることができる。

(1-4') [象は {鼻が長い} です。]
(1-5') [彼は {足は速い} です。]
(1-6') [戦国時代は {複数の武将が勢力をふるって対立した時代} です。]
(1-7') [おススメは、{僕はスタバのホットココア} です。]

(1-1) (1-3) (1-6) (1-7) は名詞文で、(1-2) (1-4) (1-5) は形容詞文である。名詞文、形容詞文、形容動詞文において、補足節が主節の述部になっている場合、主節述部の終助詞は省略することができる。動詞文以外の場合で注意すべきことは、補足節の後に主節述部の終助詞を入れることができるということである。(1-4) (1-5) (1-6) (1-7) に対して非文の (1-1) (1-2) (1-3) は、文末にある終助詞は主節述部の終助詞ではない。名詞文、形容詞文、形容動詞文は、文末の終助詞が主節の主部と結び付いているかどうかが重要である。

以上の考察から、補足節を含めた第一従属節類は「中級文型」としてどういった複文構造として学習すればいいのか、その文型のパターンと例文[13]を並べる。

第一従属節類の文型

第一従属節が主節主部の時……

[{第一従属節} 助詞　主節述部]

(1a) [{僕が勉強をしているの} は就職のためだ]

第一従属節が主節述部で、主節が動詞文の時……

［主節主部｛第一従属節｝主節述部］

(1b)［僕は｛この馬が今度こそ勝つ｝と思う。］

(1c)［彼は｛煙草を吸う人｝を嫌っている。］

第一従属節が主節述部で、主節が名詞文、形容詞文、形容動詞文の時……

［主節主部｛第一従属節｝（主節終助詞）］

(1d)［象は｛鼻が長い｝。］

(1e)［象は｛鼻が長い｝です。］

主節主部と主節述部がそれぞれ第一従属説の時……

［｛第一従属節｝助詞｛第一従属節｝（主節終助詞）］

(1f)［｛安い事｝は｛良い事｝だ。］

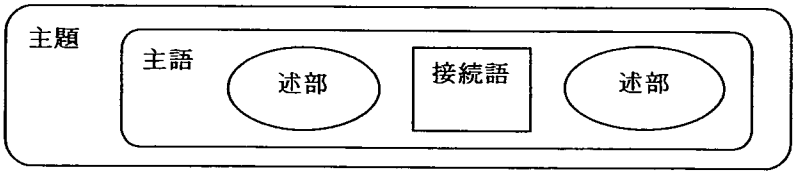
この文型をもとに補足節の文法を説明することで、学習者は補足節の文法を捉えられるようになると考える。

4．4．2　「適切な複文構造の習得」と「適切な接続語の習得」

次に「適切な複文構造の習得」と「適切な接続語の習得」を考える。主題レベルの助詞と主語レベルの助詞の及ぶ範囲から、連用節と並列節を合わせた大囲従属節は三つのパターンに分けることができる。

第二従属節類は、従属節に主語がある時、その主語が主節にも及ぶものであり、この場合、主節に他の主題、主語は入らない。

図1　第二従属節類の構造図



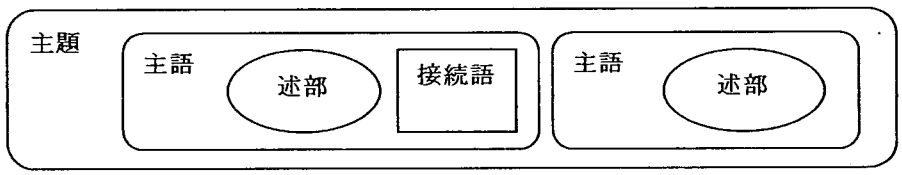
接続語、従属節……ながら、つつ、まま、テ節・中止節（補助動詞、付帯状況、単純並列、継起、手段）など

第二従属節類の文型……［従属節主節］

(2a)［僕は走りながらボールを蹴った。］
(2b)［明日のテストを気にしつつテレビゲームをしてしまう。］
(2c)［電気を点けたまま寝てしまった。］
(2d)［列車が走っていく。］
(2e)［鼻歌を歌って帰った。］
(2f)［あの店が安くておいしい店だ。］
(2g)［朝食を食べて玄関を出た。］
(2h)［車に乗って買い物に行った。］

次の第三従属節類は、第二従属節類と違って従属節に主語がある時、主節でそれが変わるものである。また接続語によっては、従属節に判断的内容の入るものと入らないものがある。判断的内容とは文末に付くモダリティ表現のことである。

図 2　第三従属節類の構造図

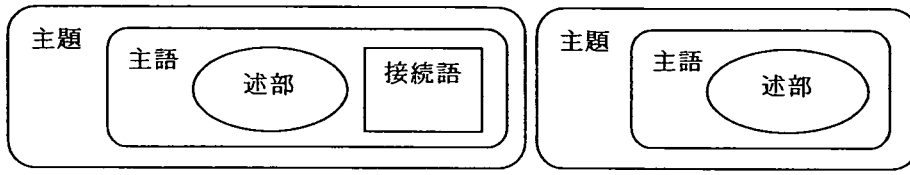


接続語、従属節……けれど、から、時間節、条件節、テ節・中止節（原因、対比）など
第三従属節類の文型……［従属節／主節］

(3a)［太郎は頑張ったけれど、／勝てなかった。］
(3b)［太郎は頑張ったけれど、／次郎は頑張らなかった。］
(3c)［テストの結果が良かったから、／今日は遊んだ。］
(3d)［今日はテストの結果が良かったから／遊んだ。］
(3e)［僕が家に帰った時、／父はもう家に居た。］
(3f)［ガスが切れて、／料理が出来ない。］
(3g)［今日は太郎がご飯を作って、／次郎が部屋を掃除する。］

最後の第四従属節類は、従属節と主節で、それぞれ主題も主語も異なるものである。

図 3　第四従属節類の構造図



接続語、従属節……テ節・中止節（並列）など

第四従属節類の文型……［従属節｜主節］

(4a)［僕が餅を搗いて｜彼がそれをひっくり返す。］

(4b)［今日は太郎がご飯を作って｜明日は次郎がご飯を作る。］

(4c)［僕が書き、｜彼が読む。］

従属節の種類によって、節をまたいだ時の主題と主語はどうなるか、表にしてみると次のようになる。

図 4　主題と主語のパターン

A ＼ B	主題	主語
第二従属節類	同じまま	同じまま
第三従属節類	同じまま	変わる
第四従属節類	変わる	変わる

A……従属節類

B……主題／主語

4．5　「中級文型」まとめ

「中級文型」を以下の文法説明をもとに統一することで、学習者の複文構造の学習が分かりやすくなると考える。

第一従属節類……［{第一従属節} 助詞　主節述部］

［主節主部 {第一従属節} 主節述部］

［主節主部 {第一従属節}（主節終助詞）］

［{第一従属節} 助詞 {第一従属節}（主節終助詞）］

第二従属節類……［第二従属節主節］

第三従属節類……［第三従属節／主節］

第四従属節類……〔第四従属節｜主節〕

5．おわりに

現在、本研究は以下の課題を残している。まずこの「中級文型」は本当に日本語の文法に忠実なのか、また従属説が複数ある時はどうなるのか、考察を進めなくてはならない。また「は」と「が」以外の主部になれる助詞がそれぞれ主題レベルなのか主語レベルなのか考えなくてはならない。例えば助詞「も」は「は」と同様に主題レベルでも主語レベルでもあるようなのだが、文によっては成り立たないものがあって簡単に結論を出せなかった。そのため今回は「も」を省いて説明している。また4．1で挙げた『新版標準日本語初級上・下』に載っている文型を、どの従属節類に属するのか分けなくてはならない。そして実際にこの「中級文型」を教科書文法とすることで、学習に効果が表れるのかどうか、調査が必要である。

現在の日本語教育の教科書文法には文構造を捉えた文法がなかったが、「中級文型」がその役を担ってくれることを期待している。

注

1 本論文は2009年11月21日に行われた愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会第10回記念研究大会で発表したものに修正を加えたものである。

2 益岡隆志1997。pp. 11-15を参考。

3 『新版中日交流標準日本語　初級上』（人民教育出版、光村図书出版株式会社合作编写2008）のp. 284では「铺垫」と書かれている。

4 3と同じ。p. Ⅸから。

5 南京外国語学校。2008年度に筆者は外国人専門家日本語教師として一年間勤めた。

6 日本語教育学会編2005。p. 757を引用。

7 6と同じ。pp. 757-758「学習段階」筆者西川寿美を参考。

8 6と同じ。p. 179「コト・ノ・トコロ——名詞節」筆者阿部忍と、益岡隆志1997　pp. 17-24を参考。

9 6と同じ。pp. 168-169「カラ・ノデ・テ——原因・理由」筆者前田直子と、p. 175「とき・折・頃・際」筆者岩崎卓を参考。

10 「中級文型」の従属節類や接続語などに関して、ここでは2009年11月の研究大会で発表したものを元にしている。そのため筆者が2010年1月に書き上げた修士論文「日本語教育のおける『中級文型』のあり方」とは異なった分類、内容である。また修士論文では接続語ではなく接続要素と呼んでいる。

11 この問題は生徒の母語（中国語）の影響かもしれないと、筆者と同じ大学院の中国人の

院生から助言があった。

12 (1-4)(1-5)(1-6)(1-7)と(1-4')(1-5')(1-6')(1-7')は筆者が作った例文である。

13 (1a)から(1f)、また後に出てくる(2a)から(4c)までの例文は全て筆者が作ったものである。

参考文献

市川保子 1997『日本語誤用例文小辞典』凡人社

時枝誠記 1941『国語学原論』岩波書店

日本語教育学会編 1990『日本語教育ハンドブック』大修館書店

————2005『日本語教育辞典』大修館書店

橋本進吉 1969『国文法體系論』岩波書店

益岡隆志 1997『新日本語文法選書 2　複文』くろしお出版

森山卓郎 2000『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

参考教科書

人民教育出版、光村图书出版株式会社合作编写 1988『中日交流标准日本语　初级上』人民教育出版社

————1988『中日交流标准日本语　初级下』人民教育出版社

————1988『中日交流标准日本语　中级上』人民教育出版社

————1988『中日交流标准日本语　中级下』人民教育出版社

————2008『新版中日交流標準日本語　初級上』人民教育出版社

————2008『新版中日交流標準日本語　初級下』人民教育出版社

————2008『新版中日交流標準日本語　中級上』人民教育出版社

————2008『新版中日交流標準日本語　中級下』人民教育出版社